

シヤンテイ

shanti

2012
春
3月号

一歩ずつ前に

特集

東日本大震災から一年



公益社団法人
シヤンテイ国際ボランティア会

プロジェクトの風景

いわてを走る移動図書館プロジェクト 新しい年へ

2011年大晦日、岩手県大槌町の吉祥寺さんに2年参りに行ってきました。

地元のひとばかりでなく、正月に帰省してきた人など大勢の方がお参りにきています。甘酒や年越しそばの提供、ミニコンサートを地元の方が行っていました。

お参りにきた方の中には、除夜の鐘について気持ちがすっきりしたとお話しされている方がいました。1年を振り返りいろんな思いが交錯しながら鐘の音が響いているように感じました。

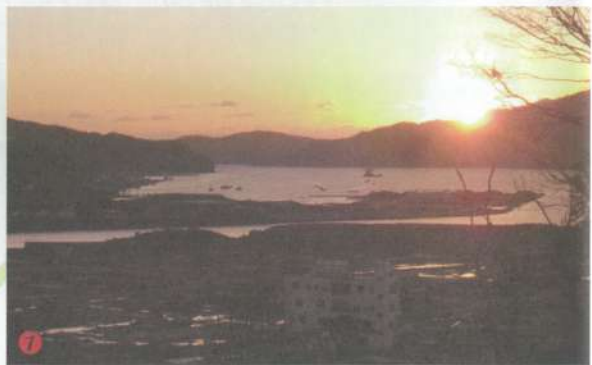
また被災地での支援活動が続け、地元の再建のために必死に取り組んでいる方と多く出会う中で、町には少しずつ灯りがともりだし、

多くの人の笑顔が見ることができました。そういった姿を見るたびに、胸が熱くなる思いがし、地元の人たちの活動を応援していきたいと感じております。

これからも住民の方と悲しみも喜びも共にしながら活動が続けていきます。(岩手事務所 近藤光俊)

近藤光俊(こんどうこうしゅん) 長野県出身。広報課インターンを経て、2011年から岩手事務所のボランティアスタッフ。活動の運営・大槌町の拠点「かねざわ図書室」整備などの業務を担当。

- ① 12月、新しい移動図書館車が走り始めました
- ② 「立ち読み、お茶のみ、おたのしみ」本を選び利用者にコーヒーのサービスも
- ③ 2月5日、大槌町「かねざわ図書室」がオープン。親子で絵本を楽しむ姿がみられました
- ④ 「クリスマスの紙芝居をしてあげようか?」「自分でやるよ」(山田町の仮設団地にて)
- ⑤ 消防団の出初め式 (写真提供: 大槌町)



⑥ 地に「一頁堂書店」が開店したのも嬉しいニュース (写真提供: 大槌町)
 ⑦ 近藤スタッフが年越しをした大槌町中央公民館から望んだ初日の出。
 ⑧ 年末年始休み後、久しぶりの運行。雪が降る中、来てくださった方の背中をありがたく見守る

巻頭言

道

私たちの希望、ひそかな誇り

監事 青木利元



企業社会貢献活動を担当している友人の話です。「東日本大震災の被災地支援活動で各地を回ったけれども、NPOとボランティア

が必ずどこかで活動していた」というのです。

阪神・淡路大震災の時とくらべ今回の活動が大きく異なるのは、ボランティアに加えて多くのNPOが参加して多様な活動を展開しているということです。

100万人を超えるボランティアが被災地に集まった1995年は「市民ボランティア元年」と呼ばれました。私は、2011年は「市民社会元年」と呼ばれるようになるのではないかと思います。まず、支援活動を支える組織的・制度的枠組みを整えられ厚みを増しつつあります。「NPO法の改正」と「新寄付税制の導入」はNPO法人のみならず民間公益

を担う非営利組織(市民社会)にとって画期的な制度改革となりました。今後大きな追い風となる可能性があります。一方、支援活動を行う組織・担い手の側にも、「一回ぼっきり」ではない息の長い支援活動を目指そうという意識が生まれてきています。

SVAは「気仙沼」と「岩手」で支援活動に取り組んでいます。前者は被災地域のコミュニティに寄り添う活動、後者は移動図書館活動です。震災直後、地元に入ったSVAが真っ先に手を差し伸べたのは人道支援活動、そして被災地をめぐる情報を集める中でSVAの得意技である図書館活動の提供に至ったのでした。ここには

SVAの被災者ニーズへの対応の進化のプロセスが映し出されています。

13兆円という我が国の復旧・復興予算に比べれば、SVAの活動の規模は実に微々たるものです。しかし、SVAのようなボトムアップの活動、つまり自由な発想で村落や町の人々とともに取り組む草の根レベルからの復興活動があつてこそ社会を支える相互扶助や思いやりの精神や心が培われるものだと思います。そこにSVAの活動の存在意義があります。「気仙沼」と「岩手」、それは私たちの希望であり、ひそかな誇りなのです。

(ボランティア活動国際研究会代表)

SVAの使命



私たちは、地球上の貧困や戦争、内紛、環境破壊、災害などによって苦しむ人々のそばに立ち、苦しみを分かち合い、その人々と共に解決のための活動を行います。特にアジアにおける教育・文化活動を通じて、「共に生き、共に学ぶ」ことができるシャンティ(平和)な社会の実現をはかります。

Cover Photo

気仙沼市本吉町に天保時代から伝わると思われる「平磯虎舞」が、初日の出を背に演じられた。津波によって虎舞の道具は全て流されたが、全国から寄せられた支援で復活。漁師町の心意気を示している。

一歩ずつ前に

東日本大震災から一年



11月、淳宏さんと種つけたワカメを運ぶため船を出す及川敏さん（気仙沼市蔵内漁港で）



あの日から一年が経とうとしています。地震や津波で被害を受けた方々に、そして、原発事故の収束が見えない福島県に住まいの方、全国に避難している方々に心からお見舞い申し上げます。私たちにとっても、春は辛い記憶の季節になってしまいました。

東日本大震災の被災者支援活動が、通常の緊急救援活動と異なるのは、津波被害が市街地中心を含め広範囲に及んでいることです。水産会社など、地元の産業資源まで流失してしまったため、住民は住む家を再建するだけではなく、自分たちの地域、産業まで立て直していくという大きな課題を背負うことになりました。この1年、SVAは被災地に事務所を構えて生活し、住民と共に課題に向きあってきました。その中から気仙沼市、山田町、陸前高田市の人びとの今をお伝えします。

この3月、どうぞ一緒に考えてください。なにかも変わってしまっただけの春を再び迎えた人びとに、自分は何ができるかを。

長期ボランティアが見た 気仙沼の1年

聞き手：広報課 清野陽子

いつ来ても
おかしくない
に備える



須賀良央（すけらゆう）さん
31歳、静岡県浜松市出身。曹洞宗静岡県第4宗務所、曹洞宗静岡県第4宗務所青年会から復興支援活動の現地代表として派遣され、2011年3月21日気仙沼入り。2年間、SVA気仙沼事務所で活動する。



私の寺は浜松市にあるので、東海地震に備えて防災減災の取り組みをしてきました。でも、気仙沼に来て、寺が避難所になっていくのを目の当たりにしたのは衝撃でした。100人も200人も被災者を受け入れる当事者になるんだと考えたときに、なにを備えるかを真剣に考えないといけないと実感しました。寺が、地域の中の半公共的施設になり得るということ。葬式だけのつきあいなら、非常時に人は逃げ込んでこない。日常的に出入りしている関係がないと、避難所にはなり得ません。

ことを把握していなかったの、何週間も物資が届かなかったり、どんな物資があるか、寺同士で知らなかったりという問題が出たことも聞きました。寺のネットワークを作り、避難者や物資の受け入れ状況を市役所や社会福祉協議会にも把握してもらったことの重要性を認識しました。

静岡の災害への備えも、もっとスピード感を持って、取り組んでいかないといけないと感じています。

SVAでは、仮設住宅を担当しています。住民には仕事や移転について焦りもあるようですが、「そんなこと、今いってもし方ない」といういい意味でのあきらめも感じます。話をしていると、「あんたいつまでいるの？」と聞かれることもありま

す。「俺は帰らないよ」というとほっとされます。復興は障害物競走だと思っんです。ひとつ乗り越えれば次の課題が現れてくる。走るのには地元の人たち。その障害の高さを知らせてあげたり、踏み台を作ったり、自力で乗り越えられるように手伝うのがぼくたちの仕事。そして、全くの黒子ではなく、そばで見守る。障害を超えていくときに脇で「がんばれ」と励ます役割が、SVAです。

現場には、熟練した人が必要だと実感しています。大変だけど、人を育てるには「転ぶとわかってもらえない」経験を踏ませないといいないですね。SVAに対しては「次の世代を育ててください」と言いたいです。

学生ボランティアグループ「Youth for 3・11」の1期生として、6人で4月1日から1週間、宮城県南三陸町で活動しました。東日本大震災の被害を見て、なにかしたかったからです。物資の仕分けなど、行政も被災者も救援物資の行き先を知らないような状態の中で、物流システムができていないことによる非効率や人間関係の衝突に遭遇しました。ホームページで見ること、現地の実態がリンクしてこなかったの、長期受け入れをしている団体を探してSVAを見つけ、気仙沼事務所に4月23日から5月末まで活動しました。もっと深く長く関わりたいと、8月にアパートを引きはらって気仙沼に戻ってきました。

現在の本吉の人たちですか？仮設住宅に入ってほっとしているもの、「2年で退去しなくてはいけない」と聞かされて、焦っています。

本吉に
よりそって
8カ月



杉山知佐子（すぎやまちさこ）さん
24歳、被災地でなにかしたいと気仙沼に飛び込んだ行動派の大学生。2012年は大学に戻り、卒業論文に取り組み予定。



地域の誇り、三陸のワカメを再び

12月 ワカメやホタテを養殖している及川淳宏さんを気仙沼市の蔵内漁港に訪ねました。親を手伝いながら小学生の頃から船に乗っていたという及川さん。東日本大震災では養殖資材が津波にさらわれ、再開のため、多くの作業が必要となりました。

養殖設備を固定するアンカーとして、重さ50キロある土俵をロープの両脇に30個ほどつけて、海に沈めます。及川さんが必要とした



土俵は6000袋。これを作るのが、漁師にとって一番の重労働。今年はまだ養殖は無理だとあきらめていたそう。「人手さえあったら」それを聞いたSVAがボランティアの大学生を派遣。2日間で土俵2200袋ができあがったのを見たとき、背中をドンドン、と押された気がして、嬉しかった。これで今年もワカメが作れる」と確信したそう。

の中から見つけたメカブの種を育てて、初めて種つけたワカメは2月に収穫。蔵内地区のワカメは品質がよく、気仙沼市内では大島や唐桑と一、二を争うほど。そのワカメを作る蔵内の漁師さんだけにこだわりもひとしお。

そして、同市前浜地域振興会長の菊地敏男さんにも伺いました。ワカメを作りはじめて2年、やっと養殖が軌道に乗ってきたところで津波に遭遇、養殖を再開して12月上旬に種つけし、3月に収穫予定です。知人と法人を立ち上げ、ワカメ販売を始める予定。将来は通年でホタテ、ホヤの養殖に広げたいと語ります。



仲間の漁師の4人で養殖業を再開した及川淳宏さん

菊地敏男さん

まちづくりが住民の力でできるように

気仙沼市津谷地区で流出した5世帯の集団移転と、地区のまちづくりに参加しています。三陸縦貫自動車道が移転候補地の近くを通ることがわかり、「集団移転協議会」と「集団移転及び地域振興に関する懇談会」にて、専門家を交えた勉強と懇談がなされる中、SVAは調整とワークショップな

どを提案し、住民とともに地域のあり方を考えています。津波で無事だった家が立ち退きの対象になるなど、三陸縦貫道のルート次第で、今後の住環境や暮らしが変わってくるため、住民感情も揺れています。「この地区全体でどんな暮らし方をしたいのか」を整理するために、まず模型を一

緒に作ることを提案。地形と道路、宅地の関係を把握し、自分たちで話しあうことのきっかけづくりになります。地域の人が集まる場所づくりも考えています。澤野建築研究所の澤野さん、アトリエU都市・地域空間計画室の宇野さんと協働しています。

気仙沼

つながる人の和

復興プロジェクト気仙沼

三世代(老人・壮青年・子ども)が安心して楽しく暮らせる地域に



人が集まる場所を自分たちで

前浜集会場(前浜マリセンター)は年間イベントが270回、利用率日本一といわれるほど、文化・芸能活動が一年中催されており、住民の発表会やふるさと祭り、大漁唄いこみや虎舞などを通して、地域のよりどころとなっていました。が、流失してしまいました。

コミュニティ活動を評価されて、ルーテル教会救援から建設資金の提供を受けることが決定。住民が建設委員会を作り、設計から建設まで、住民が提供した地域の木も

使う「住民参加型」で2012年の完成を目指します。

SVAでは建設資金の一部の調達をお手伝いする他、振興会へのアドバイスや、設計の「一般社団法人天然住宅」と調整、ワークショップやイベントを開催し、自分たちの集会所という意識を高めるお手伝いをしています。

建設委員は「新しいコミュニティセンターは、震災を経て作られた津波の記憶や、地域住民の復興への想いのつまった場所にして

いきたいですね。活動の復興に加え、農業漁業などの一次産業の活性化やソーラーパネルなどの自然エネルギーの活用を図る場所として、震災以前よりも地域が発展する拠点として活用していきたいと思っています。そしてこれが地域復興の1つのモデルケースになればと考えています」と意気込みを語りました。

お母さんとおばあちゃんのネットワーク

仮設住宅の住民が集まって、ワイワイとあみものをしましょう、という「場」を提供するのがこの「あんでねっと」のプロジェクト。東日本大震災で被災された方々のコミュニティ、ネットワーク支援を目的としています。岩手県の「あんでねっと@山田町」とも進行しており、大谷小中学校仮設住宅での「あんでねっと@大谷」の編み手は30人ほどに増えました。漁師・農家の奥さんで家事や農作業に忙しくしていた方ばかり。旦那さんがガレキ撤去の仕事に出ている昼間、することがなく困っていたと言う方も。

このプロジェクトは内職ではなく、アクリルたわしの売上金の一部は集会所での活動資金(光熱費や備品、集会所の運営)に充てられます。「商品として質を揃えよう」と意識が高まり、仕上がり、包装にもいっそう気を配るようになりました。

「仮設住宅に住んでいて、周囲のことに興味を失っている人は少なくありません。一生懸命できることがあるのは大切。住民のため、集会所の利用を活性化したい」と「あんでねっと@大谷」代表の小松さん。



<http://anndenet.blogspot.com>

「復興のアクリルたわし」は、「あんでねっと」のホームページからご注文いただけます。ホームページは、活動のコーディネートと販売を担う有馬朝朗さん(山口県周南市)が運営しています。

子どもの傷ついた心を癒す



心のケア活動は、夏休みに引き続き協力していただいている鶴見大学の学習支援「まなびーば」の中に取り入れてもらいました。子どもたちは冬休みに友達に会えることや、ボランティアのお兄さんやお姉さんとお話してできることが楽しみとなっていました。

SVA気仙沼事業からは、この「まなびーば」のプログラムの一環として、「子どもたちが描く声」Book for the Future」というプロジェクトを実施しました。このプログラムを通して、子どもたちが自由に気持ちを表現する空間をつくり、楽しんでもらうこと、友

達同士の絆がさらに深まることを目指しました。子どもたちからは「楽しかった、また来てね!」「みんながたのしくするためにまなびーばをはじめたんでしょ。とってもありがとう」という言葉が聞かれ、どんなところが楽しかったかという質問には、「絵を描くのがたのしかった」、「いろんな絵をかけるから」など、こころのケアのプログラムが子どもたちにとって有意義な時間となったのだと実感しています。

今後、SVA気仙沼事務所では仕上がった作品の中から物語を作り、気仙沼の未来への願いも含め、さまざまな環境で壁を乗り越えようとしている人々の希望となるような絵本づくりを目指しています。冬休みに子どもたちが体験した時間がどんな影響を与えたのか、今後どのような結果を導くかはわかりませんが、みんなで過ごした時間やできあがった作品を手に、いつの日か子どもたちにとって振り返るもの、また前に進むための踏み台となってもらえたらと願いを込めて、ただいま絵本を作成中です。(気仙沼事務所 東さやか)

山田町



町の図書館が帰ってきた

2011年11月1日、山田町立図書館を訪ねました。山田町役場に隣接するコミュニティセンター内に置かれ、震災後約8カ月にわたり閉鎖していた図書館が、この日再オープンすると聞いたからです。入口にかけられたプレートには「図書館開館」の文字。出迎えてくださった桜井俊雄館長はじめ、ここまで図書館の業務再開に努めた職員の方たちの表情も一様に晴れやかでした。

コミュニティセンターは小高い場所であり、津波の被害は免れました。ただし、図書館職員が1人被災して亡くなり、また町内2つの施設に保管していた約3万冊の書籍類も流されてしまいました。図書館はすぐに閉鎖。コミュニティセンターは避難所となりました。

私が山田町立図書館を初めて訪れたのは6月17日のことです。震災後3カ月、館内はまだ所々電気が消えて薄暗く、トイレに洗濯機が置かれるなど緊急時の様相でした。その中で、館長以下図書館職員3人が図書館の一日も早い再開

いわてを走る

移動図書館プロジェクト

「立ち読み、お茶のみ、おたのしみ」
地元の図書館、書店、自治会とともに進めています



①桜井俊雄山田町立図書館長と再開を支えたスタッフ ②再オープンした図書館 ③10月下旬、図書に分類シールを貼るお手伝いをしました。④4月に始まった滝沢村の移動図書館活動は、秋に北上市が引き継ぎ、2012年1月、その権をSVAがしっかりと受け取りました。⑤大手さん親子が経営する大手書店からも、定期的な本を購入しています。お店は春ごろに仮設テントから、より丈夫な仮設商店街に移転する予定です。

を願って現有図書の確認と登録作業に奮闘していました。この日ボランティア2人とともに訪れたのも、図書の書誌データ入力をお手伝いするためでした。職員は明るく親切な方ばかりでしたが、穏やかな腰痛の中にも疲労の色は隠せないように感じました。

移動図書館の利用も増える

SVAでは、翌7月24日から山田町内の3つの仮設団地で移動図書館活動を開始しました。事務所のある遠野を軽トラックで出発。背中合わせにした本棚を荷台に積み、キャンプ用のタープを上げたその下でお茶を飲んでいただくなど、住民とのふれ合いも重視しました。初日一カ所目は豊間根地区の仮設団地。滞在時間一時間の間に訪れた人の数はわずか3人、貸し出し図書数は6冊でした。桜井館長も、「最初はSVAという団体のことも知らず、移動図書館でお茶を出すとも聞いても何をしたいのかわからなかった」と。それは住民の方にとっても同じだったかもしれませぬ。

しかし、2週間ごとに同じ時間うかがう、チラシのポスティングやお声掛けなど、地道な活動が功を奏してか、10月には、一日3カ所の仮設団地を回って利用者50〜60人、貸し出し図書数100〜120冊を数えるまでになりました。毎回来てくださる見慣れたお

本を読んで心の復興を

図書館の再オープン後は一日40人前後が訪れ80冊前後の本が借りられているそうです。ただし、これは震災前の5割程度の数字なのだとか。ひとつには開館日数を減らしたということもありますが、これまでは図書館に歩いてやって来る人が多く、それらの人が図書館から遠い仮設団地に移ってしまい、通えなくなったことも大きいようです。

「SVAの移動図書館活動は、図書館まで来られない人にとって特にありがたいものでしょう。SVAのみなさんが一生懸命やっていることはすぐにわかったし、今は何がしたいのかよく理解できませんよ。被災した方々にとって、読書は心のいやし、やすらぎになる。本を通して一日も早く心の復興が図られることを願っています」と館長。2012年1月からは、SVAの移動図書館も本式になり、訪問する仮設団地の数も7カ所に増えました。

「立ち読み、お茶のみ、おたのしみ」のキャッチフレーズそのままに、より多くの人により多くの図書を、気軽にくつろぎながら楽しんでいただけるよう、山田町を走ります。(岩手事務所 古賀東彦)

陸前高田市

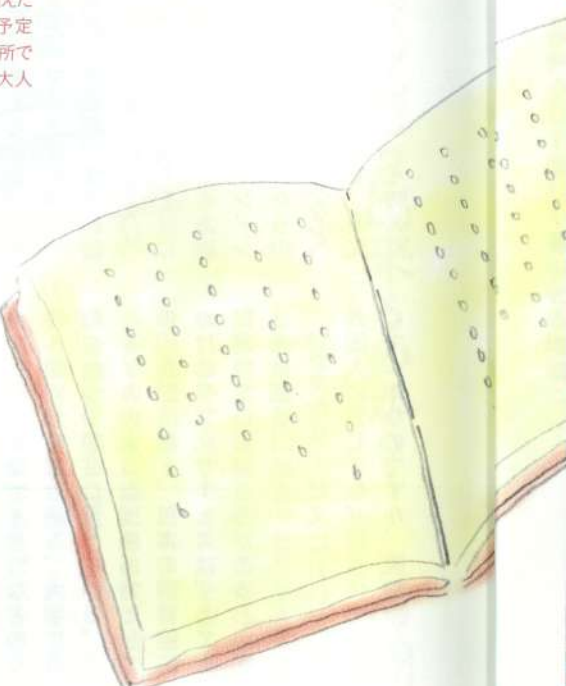


集会所は憩いの場

陸前高田市にあるオートキャンプ場モビリアは、震災当日から6月下旬までセンターハウスおよび宿泊棟を避難所として、多い時で120人ほどが共同生活を送っていました。現在は、長屋式住宅戸60戸、戸建て住宅108戸の仮設住宅が建ち並ぶ巨大な団地となっています。モビリア避難所からそのまま仮設住宅に移り住んだ家族もいますが、他の避難所から来た家族も少なくありません。

2011年12月上旬、今まで無かった集会所がモビリア内に建ちました。やっと住民が集えるスペースができたのです。年末には、そば打ち体験やボランティアさんとの年越しパーティーなどの催しが集会所でありました。12月30日に行われた蕎麦打ち体験は、長野県から届いた蕎麦粉を使用し、DVDの映像を見ながら小学生から大人まで楽しくそば打ちを体験し、その後はみなで本格的な蕎麦の味を堪能しました。仮設住宅の住民が気軽に集まることのできるの、集会所が近くにある、利用しやすい環境にあるからだ、と痛感しました。

①オートキャンプ場だったモビリアは小高い山の中にあります。緑に囲まれた移動図書館。②モビリア自治会長の千田勝治さん。③図書スペースと談話室を備えた第2の集会所も3月に完成予定です。④2011年末に集会所で行われた蕎麦打ち。子どもも大人も楽しく体験しました。



集会所に望まれること

この168戸の仮設住宅を取り仕切る自治会長の千田勝治さんは、SVAが今年3月の完成を目指している第2の集会所(集会所施設付き図書室 名称未定)を心待ちにしています。

長屋式仮設住宅は、同じ地区の住民が多く入居しているため顔見知りも多いのですが、一戸建て仮設住宅の方は市内のさまざまな地域から来ているため、どんな人が住んでいるのかわかりません。

第2の集会所は、そんな一戸建ての仮設住宅付近に建設予定です。今まで催し物に参加できずにいた人が、近くに新しい集会所ができることよって参加しやすくなるのではと千田さんは考えています。

この第2の集会所に期待されるのは、仮設住宅住民の集いの場としての機能だけではありません。陸前高田市の西側地域には、2つの仮設子ども図書館が開設されています。

モビリアのある東側地域に図書館ができることにより、広田町や

人と人をつなぎたい

いわてを走る移動図書館プロジェクトでは、モビリア仮設団地でも月2回移動図書館活動を行ってききました。

活動が始まったのは、避難所から仮設住宅に移って約1カ月、やっと荷物の整理が付き始めたころでした。それまでは、好きだった本を手取ることも忘れ、震災後ただ皆と生き抜くために過ごしていた日々でした。「本を読んでみようかな」と思えるようになったのは、仮設住宅まで軽トラックに沢山の本を積んで持ってきてくれたから、という方がいました。

移動図書館活動では、多くの仮設住宅を巡回するため1カ所1時間という時間の制限があります。モビリアに仮設図書館が出来ることにより、1時間という制限がなくなりより多くの時間を仮設住民の皆さんと共有できるようにになります。本を借りるだけでなく、カフェやおしゃべりを楽しんでいただきたいと思います。

コミュニティにとって身近な存在は大切なことです。人が集う場が提供されることで、人と人が結ばれていく。少しでも住民の方のお役に立てたらと思います。

(岩手事務所 吉田晃子)

図書館の国際協力と 多文化サービスは 似ています



「図書館は 国境をこえる」の評者
小林卓さん
こばやし たく

SVA創立30周年記念出版として、昨年、SVAはこれまでの図書館活動の歩みを集大成した「図書館は、国境をこえる」(教育史料出版会)という書物を発刊した。

幸いなことに、その後、『図書館雑誌』9月号に書評が掲載され、反響をいただいた。それを「執筆くださったのは、実践女子大学の准教授で「むすびめの会」(図書館と在住外国人をむすぶ会)の創立者の一人でもある小林卓さんである。昨年12月、東京日野市にある大学の研究室を訪ね、お話をうかがうことができた。

お部屋に通されると壁に見覚えのあるものが飾ってある。なんとSVAクラフト・エイドで扱っているモン族のライフシートの刺繍

を主たる対象とする図書館サービスで、日本におけるマイノリティの知る自由、読む権利、学ぶ権利を、資料・情報の提供によって保障しているというものなんです。かつては読書少年だった小林さん。家族もみんな読書好きで、お父さんとお兄さんと小林さんの三人がたまたま同じ本を買ってくるのが何度かあったという。図書館学に関心をもったのは京都大学の学生の時。日本の公立図書館の多文化サービスが世界的に遅れている現実を知って、一念発起し、卒業論文は『在日、韓国・朝鮮人に対する図書館サービス』というテーマで執筆。その後、東京大学大学院に進学。当時、法政大学多摩図書館におられた高畑圭子氏と出会い、1991年、一緒に「むすびめの会」を設立した。以来、多文化サービスについての勉強会の開催、会報によるネットワーク、『多文化社会図書館サービスのための世界の新聞ガイド』などのツールづくりに取り組み、大学に奉職されつつ現在に至っている。

SVAのような国際協力としての図書館活動と、日本の図書館における多文化サービスは、とても似通っているところがあると小林さんは語る。

「多文化サービスにおいても、外国人に対してなぜ医食住ではなくて、本なのか、図書館なのか

ですか、と聞かれるんです。シャンティさんも難民キャンプでそう言われたわけですよね。たしかに、まず「医食住」がだいじです。でも人間はそれだけでは生きていけない。私たちがそういうふうにはしゃるような心にも栄養が必要だということですね。

SVAの図書館活動と多文化サービス、そこに共通した人間観や価値観があるのだろうか。今後、お互いに学び合うことができるのかもしれない。劇作家であった故井上ひさしの言葉を引用しながら、ご自身の図書館像についても語ってください。

「この言葉を目にして、図書館も同じだと思いました。笑いがなくても人は生きていけるが、笑いのない人生はつまらない。同じように図書館がなくても社会は成り立つが、図書館のない人生もつまらない。笑いも図書館も「持ち寄り」と「分け合い」です。それと図書館には「仕掛け」も必要ですね。さあ来てください、というだけではないんです。行きたくなる「仕掛け」も必要です。ですから、学生にいつも話すんです。図書館員に必要な資質は、資料を知り、利用者を知り、両者を結びつける術を知ることだけれど、もっとだいじなのは、人の喜びを自分の喜びにできる感性である……」

現在、岩手で展開しているSVAの移動図書館活動にも期待感を示してください。

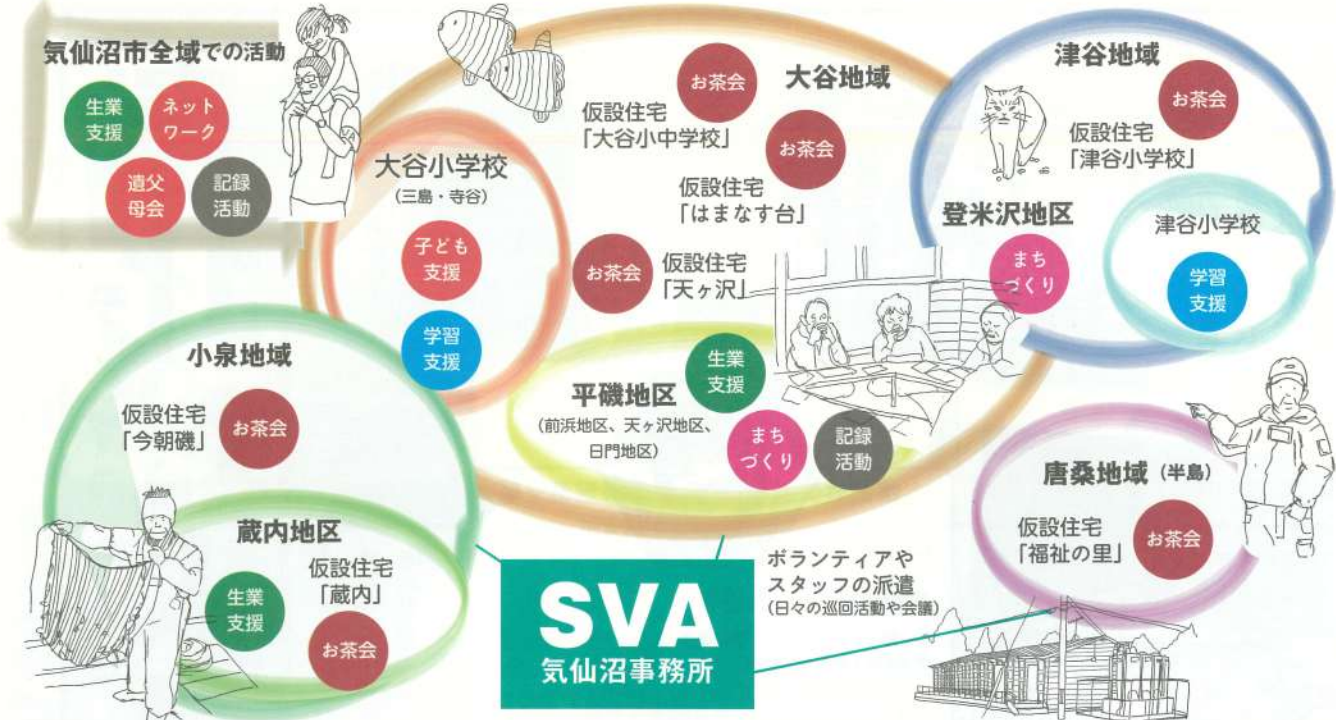
「図書館は触媒だと思っています。それ自体がはたらく、というよりそれが仲介することで前と後を変えていくということですね。震災前よりもっとよくなったね、と、3年後、5年後、地元の人たちが自立して引き継いでいけることをめざしていただきたいです。」

書評の中でも言及されていたが、古代エジプトの図書館には「魂の治療所」という文字が彫ってあったといわれる。世界遺産の一つであるスイスのザンクト・ガレン修道院の図書館にも同じ言葉が掲げられているという。その映像を見せてください。

修道士によって、一文字、一文字、丁寧に書き写して本は作られていく……。図書館の入り口には「魂の治療所」という文字が……。 「伝えたい」という一念、願いによって生まれたものが本であること。そして「魂の治療所」である図書館。その原点を忘れてはならないと思った。(広報 大宮俊幸)

小林卓氏の主な著作 『図書館の可能性：利用に障害のある人々へのサービス その傾向と分析』 共編 (日外アソシエーツ 2012年) 『多文化に出会うガイドブック』 共著 (読書工房 2011年) 『多文化共生と生涯学習』 共著 (明石書店 2007年)

「よりそう」は、どうやったら出来るのか？ この問いが、いつも頭の隅にあります



イラスト：清原笑子

昨年3月に始まったSVA気仙沼事務所の活動も日々の対応に追われつつ、もうすぐ一年を迎えようとしています。これまで、全国の多くの方々に私たちの被災地での活動を支えて頂きました。阪神・淡路大震災以降、これまでの被災地での活動であれば「そろそろ支援の収束を考えて……」という時期かもしれません。

しかしながら、気仙沼での活動は今、ようやく第一歩を踏んだと感じています。それは、これまでの1年間の様々なお手伝いを通じて、地域の方々との信頼関係が徐々に生まれてきた事を感じるからです。この関係の上にはか成り立たない復興支援を形づくる事が今の私たちの目標です。

気仙沼では、これまでに様々な活動を通じて支援のあり方を模索してきました。出来るだけ多くの地域で、多くの方々と言語合いたいという思いもありました。

仮設住宅でのお茶会や編み物会など、人の集まる場づくり。ワカメ養殖のお手伝い。お祭りの実施。小学校での学習支援。子どもたちの遊び場づくりなど。これらは既存のプログラムとして持ち込まれたものではなく、地元で巡り会った方々と共に試行錯誤と話し合いを重ねて創られてきた活動で

が継続してきました。共に失敗し、共に喜び合いながら継続してきました。

私たちが活動拠点としてお世話になっている本吉町前浜地区では、津波で流された「地域の集会所」を地元住民の手で再建しようという動きがあります。再建する集会所の設計や機能は住民同士で意見を出しあって決め、各々が所有する木を切り出して木材とし、建築作業も皆で参加しようという試みです。

また、同町登米沢地区では、津波で家々を流された住民を中心に、高台への集団移転や今後の地域のあり方を考えるワークショップや地域全体の模型づくりが行われています。こういった活動のお手伝い出来る事は、とてもやり甲斐のある仕事です。地域の方々と信頼関係は一朝一夕には生まれなかつたと思います。被災直後から今まで、それぞれの地域で活動を行ってきたなかで出会いがあり、そして今、このような支援の形が生まれつつあります。

「よりそう」という意識を持ち続けることは難しいことです。被災地での活動に限らないことですが、支援の方法は、時には支援する側の都合や論理で簡単に組み立てられ、実施される事もあると感じます。「よりそう」を大切にし

ながら復興支援に携われるかどうか大きな課題だと認識しています。

「よりそう」ためには、まず相手を理解しなければならぬかもしれません。気仙沼でも様々な地域に脈々と連なってきた街の歴史や地元の方々が慣れ親しんできた文化、風土があります。人、海、山、言葉、食、祭、習慣、風景等々。この地域の「宝」は何か？ この地域の可能性はどこにあるのか？ この地域の人々が望むかたちは何なのか？ そういったことに目を向けられる人、「よりそう」の精神を持った人が育成できるといえるような支援活動を継続してゆきたいと思っています。

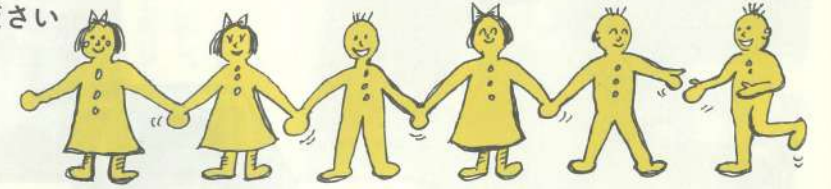
文・白鳥孝木(しらとり・こうた) 気仙沼事務所現地責任者、ボランティアとして阪神・淡路大震災で支援活動に参加。2005年SVA入職。緊急救援担当としてパキスタン洪水、ミャンマー(ビルマ)サイクロン被害などの救援活動を行う。気仙沼事務所立ち上げと同時に現地責任者となり、復興支援に携わる。





会員募集中

お知り合いの方に是非ご紹介ください



会員は、SVAの活動を さまざまな形で支える存在です

公益社団法人は、会員がつくる組織です。海外の活動を知る、「絵本を届ける運動」に参加する、「クラフト・エイド」の商品を購入する、またSVAの運営を事務局と一緒に考えるのも会員の活動のひとつです。私たちの使命（ミッション）でもある、「共に生き、共に学ぶ」ことを大切にしていきたいと思ひます。日本にいなから私たちにできることを一緒に考えていきませんか。

(会員担当 野口早苗)



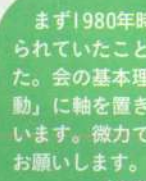
会費の納入が便利な自動口座振替の依頼書がついた申込用紙をご用意しています。事務局までご請求ください。また、クレジットカードもご利用いただけます。
<http://sva.or.jp/action/membership>

会員の声



図書館活動、国内の災害支援すべて長期にわたって行われることを望みます。私一人の参加がどれだけ役に立てるかわかりませんが、一生懸命活動させていただきSVAの皆様と少しでも関わってたく思ひ、参加しています。

(石川県金沢市 江川京子さん)



まず1980年時点から図書館活動を始められていたことにとっても感銘を受けました。会の基本理念である「教育・文化活動」に軸を置き続けていただきたいと思います。微力ですが、今後ともよろしくお祈りします。

(京都府京都市 磯野研さん)

会員特典



クラフト・エイドが
10%OFF

フェアトレードの手工芸品がいつでも会員割引で購入できます



スタディツアーに
参加

事業地を見学できるSVAが主催するツアーに参加できます(参加費は別途かかります)



報告会に
参加

SVAが行う各種報告会に無料が割引で参加できます



◎ 4月30日まで会員入会キャンペーン中。
◎ 夏に東日本大震災被災地での会員限定ボランティアも計画しています。

シヤンティな 人たちが Shanti

57
吉岡棟憲
Yoshioka Tokon
よしおか・とうけん

1987年から2003年3月までSVA理事を勤めていただいた吉岡棟憲老師。SVA福島県協力を結成し、福島県事務所との協力を得て、学校建設や絵本出版などのラオス事業の支援を続けていただいています。2011年、「原発事故さえなければ通信」を発行、地元と子どもたちのために尽力されています。このたびは、現在の福島県のおかれた状況を紹介するため、ご寄稿いただきました。曹洞宗円通寺住職。福島レンビニ幼稚園園長。

3・11東日本大震災から早や1年が過ぎました。岩手・宮城などの被災地からは、復興に向けた槌音が聞こえてきますので、この地域には時間の経過とともに、必ずや被災者が戻れるふる里再生がなされることでしょう。しかし、東京電力福島第一原発



原発事故に見舞われた福島 の思い

事故による放射能汚染の被害に喘ぐ福島県の復旧復興は、一向に目処が立っていません。強制指示を受け避難を余儀なくされた30キロ圏内の人たち、30キロ圏外でも子どもの安全のために自主避難している人たちが16万人を数え、この中の6万人が放射線量の低い県外へ移住している異常な状況が福島の現実です。

何の罪もない善良な県民が一瞬にしてふる里を追われ、いつ戻れるか判らないまま仮設住宅で日々を過ごす苦しみは想像以上に厳しいものがあります。幼稚園では、今でも園児の外遊びは週に数時間と制限され、ガラスバッジを常に身につけ、内部被ばくの測定を行っています。放射能の人体への影響に関する情報は、専門家の両極端の報道により混乱を招き、すべての人に精神的不安を与えています。国や東電の対応のまずさによ



るか判らないまま仮設住宅で日々を過ごす苦しみは想像以上に厳しいものがあります。幼稚園では、今でも園児の外遊びは週に数時間と制限され、ガラスバッジを常に身につけ、内部被ばくの測定を行っています。放射能の人体への影響に関する情報は、専門家の両極端の報道により混乱を招き、すべての人に精神的不安を与えています。国や東電の対応のまずさによ

り、家庭崩壊、地域コミュニティの分断、風評被害による人権問題が次々に起こり、農水産物や観光収入などの減少によって生活苦まで引き起こされています。このような福島の現実を伝えるべく「原発事故さえなければ通信」を2号まで自主発行したところ、1万部が読まれ、フランスからも申し込みがありました。被災の実情への関心が高いことを示しています。

誰もが信じて疑わなかった原発事故が現実となった今、国民ひとりひとりがどう対応したらいいのでしょうか。被災した人たちへの救済、支援はどう行うべきなのでしょう。未経験の中から手さぐりのボランティアとなるでしょうが、苦しんでいる福島の人たちのため、みんなでその方策を考えてほしいと願うものです。福島は悲劇はあと数10年も続くのですから。

休みの日は、 ちょっと一息...



【図書館ラクダがやってくる】
マーグリート・ルアーズ著
斉藤規訳/さ・え・ら書房

10ページで紹介した小林卓先生ご推薦の本です。作家で教育者の著者が世界中の図書館員に手紙を出し、各地の図書館の話聞かせてほしいとお願いしました。多くの図書館員やボランティアたちは、カメラをかまえて、移動図書館活動や本を受けとる子どもたちの嬉しそうな笑顔をおさめて送ってくれました。それらの報告をまとめたのがこの写真絵本です。私たちがあたたかい気持ちにさせてくれます。図書移動にはバスや船だけではなく、ソウやロバや列車や手押し車など、びっくりするような方法が用いられ、子どもたちに絵本を届けるために人々があらゆる手をつくしていることにワクワクします。アゼルバイジャンの図書館員の言葉に、SVAの仲間が「ここにもいるのだなあと思ひました。『移動図書館は、空気や水と同じくらい大切なものです』。(広瀬 大智)

SVVAからのお知らせ

SVVA設立30周年 記念イベントを終えて

12月10日東京グランドホテル(港区)にて「SVVA設立30周年記念イベント」が開催され、全国から多くの協力者、関係者が集まりました。

第一部は、若林恭英会長の挨拶と東日本大震災による犠牲者への黙祷から開会。SVVAの30周年を振り返る映像が流れると、活動を懐かしむ声がありました。

パネルディスカッションでは、SVVA顧問であり近畿大学副学長の荒巻

カンボジア事務所20周年

2011年11月25日、首都プノンペンにてカンボジア事務所設立20周年式典を開催しました。SVVAの活動の発端となったカンボジア難民キャンプの活動から現在までを振り返る貴重な機会となりました。

式典には、国内外から約170人の方が出席され、厳かな雰囲気の中、SVVAカンボジア事務所の歴史、活動をビデオで紹介しました。カンボジアからは、宗教省大

裕さんをコーディネーターとして、パネラーには、NHK解説委員の道傳愛子さん、NPO全国日本語リネットワーク理事長の佐藤涼子さん、SVVA事務局長の関尚士が登壇しディスカッションが行われました。今後のNGOの役割、図書館活動、共生社会をテーマに話しが進みました。その中でも、

30年前、カンボジア難民救済の活動からSVVAが手探りで始めた図書館活動が、その時の支援だけでなく、その地で持続性を持った活動として、また、普遍的な拡がりをもって、多くの子どもたちの学びと発達に大きな影響を与えてき

ている事がパネラーの皆さんの声を通じ、会場の参加者に伝わったようでした。

その後、私がファシリテーターとなり「被災地からのメッセージ」と題し、東日本大震災被災者支援活動でお世話になっている菊地敏男さん(宮城県気仙沼市)、西道雄さん(福島県南相馬市)をお呼びし、現状について「被災地を忘れず、共に考える」大切なメッセージを発信いただきました。

第二部の懇親会にも、多くの方々がご臨席いただき、懇親を深める事が出来ました。今回の30周年イベントを終えて、SVVAス

臣、教育省次官、カンボジア日本国大使館川村公使より、日本からは、SVVA若林会長、ご支援者を代表しまして曹洞宗栃木県国際ボランティア会(STIVA) 國井副会長よりご祝辞を頂きました。和平協定から20年、劇的な発展を遂げるカンボジアですが、紛争の傷跡による課題はまだ山積みです。式典を機に、一層気持ちを引き締め、より多くのカンボジアの子どもたちが、教育の機会を得られるよう精いっぱい努力して参ります。式典開催にご協力くださいました皆様に、この場をおかり



カンボジア事務所設立当時、共に草の根で活動した人々の中には、現在カンボジア園を担う重鎮とされている方もいます。

しまして厚く御礼申し上げます。
(カンボジア事務所所長 山本英里)



タッフ一同、この日、頂いたお言葉を大切に、心あらたに、共に学ぶ努力と共に生きる努力を重ね、支援活動を進めてまいります。
(専務理事 茅野俊幸)

人事のお知らせ

復職	塚本 真衣子	海外事業課業務補佐 (2月1日付) ※2011年2月3日～2012年1月31日休職
	利根川 佳子	海外事業課カンボジア担当から、国内事業課クラフト・エイド担当へ (2月25日付) ※2011年11月20日～2月24日産休
契約形態の変更	手束 耕治	カンボジア事務所アドバイザー (正職員から契約職員へ) (1月1日付)
退職	林 飛鳥	国内事業課スタッフ (2月29日付)

公益社団法人
シャンティ国際ボランティア会
〒160-0015
東京都新宿区大京町31 慈母会館2・3階
TEL 03-5360-1233
FAX 03-5360-1220
WEB <http://www.sva.or.jp>
E-Mail info@sva.or.jp
郵便振替 00150-9-61724

● 当会へのご寄付は、所得税、住民税および法人税、相続税の優遇措置が受けられます。



「シャンティ」は、FSC®森林認証紙にノンVOCインキ(石油系溶剤0%)で印刷しています。

■ 第一報を耳にしたのは海外出張先のバンコク。東京への連絡は困難を極め、職員の安全確認も家族への連絡もできず、不安に苛まれた。メールによるやりとりで、皆の無事を知り、初動の対応を連絡した。しかし、その後のことが良く思い出せないでいる。ネットやCNNから一刻と流される映像を見て、言葉を無くし、知る人の顔を思いおこし、夢か現実かわからない夜を過ごした。(事務局長 関尚士)

■ その日は、講演会の手伝いで大宮のホールにいました。役目は会場係主任。発災直後から、動揺するお客さんを避難場所の公園に誘導したり中止の告知をしたり。気がつけば夕方。結局その日は帰れず、販売に来ていたスタッフとともに大宮の妻の実家に泊まりました。(広報課 大森英史)

■ 私は福島育ち。半壊でまだ修理していないという同級生や、いわき在住だったクラスメイトからは、未だ家族離れ離れで暮らしているという年賀状が。来年はみなからハッピーな年賀状が届くよう、緊急救援担当としてがんばります！(緊急救援担当 笠井俊一)

編集後記 ■ 震度6の地震を何度も経験している宮城県育ちですが、3月11日の大きな揺れには驚きました。震源は遠いはずなのに、こんなに揺れるなんて、「まさか」が起こってしまい、先の見えないこの時代ですが、しっかりと足下を見ながら進んでいきたいです。(清野陽子)

スタッフのコメント

3・11 ぼくの